

松阪市射和村における読書施設の研究

——竹川竹斎を中心に

嶋崎 さや香

人文学専攻日本文化学専門 前期課程 2年

はじめに——研究の概要と調査の目的

本文書は、上記「松阪市射和村における読書施設の研究——竹川竹斎を中心に」というプロジェクトテーマのもと、実施された調査内容とその成果について報告するものである。その成果は、報告者の修士論文「明治初期における読書施設と読者」（平成19年度）、とくに第二章となって結実した。

本研究は、幕末から明治初期にかけて各地域に設立された、新聞縦覧所や書籍館といった読書施設の性格を、地域ごとの独自性という観点から検討し明らかにすることを目的としている。特に三重県松阪市射和町の読書施設である射和文庫を対象フィールドとして行われた。

同地は、近世期以来伊勢参りの道中に位置し、商業が栄え、国学や本草学など様々な学問の集積、交流地となり、文化の蓄積地となっていた。そのような同地を定点として、江戸期から明治期にいたる読書施設の状況と、それを巡る人々の行動、意識の変遷を明らかにし、考察することが本研究の狙いであった。

1. 現地調査概要

フィールドである三重県松阪市射和町へは、二度赴いている。

1回目 2007年7月2日

2回目 2007年12月9日

1回目の調査は、射和初訪問となるため、主として①射和町全体を見て回ることに、②また現在文庫の管理者である竹川隆子氏へのご挨拶、③さらに竹川竹斎以来の同宅と同文庫を案内していただくという目的のも行われた。

すでに記したように、射和町は江戸時代以来、水銀の精錬、加工やそれを基にした射和白粉をはじめとした物産の地であり、また、櫛田川沿岸に位置し水運を利した交易の地として栄え、裕福な商人が軒を連ねていた。射和文庫の創設者である竹川竹斎もそのような

商人の一人として財をなし、万卷の書を蓄積したのである。同町の文化的背景を踏まえ、それを理解することが、射和文庫を考える上でも重要と考えた。そのため、同町の文化の中心であった射和寺や延命寺、蓮生寺といった寺社、竹斎が設立に関わり、明治維新以後その書を寄贈しようとした射和小学校、竹斎宅に隣接する櫛田川の水運などを見て回った。特に、射和寺や蓮生寺などは、下記の通り、竹斎が村民のために講釈し、知識の啓蒙をはかった文化的に重要な場所である。

今日射和寺歌会 万葉 源氏講尺

(文政九(1826)年三月六日)

今昼時より社中出席 いせ物語講尺

(天保六(1836)年六月十一日)

今夜於蓮生寺道話 大学ト孝経ヲ台ニして道話有之 夕刻後より鐘ニ而人寄今夜聴衆貳百人たらず有之

(天保十五(1845)年九月十日)

昼前本家ニ而講有之 昼後蓮生寺ニ講席子供其他大人も少々有之 夜ニ入り同所講席今夜は人数相増貳百五十人ニも及申本堂一はい有之

(天保十五年九月十一日)

これらの記録は、『竹斎日記 稿』（松阪大学地域社会研究所発行平成三年～平成十年）から引用したものである。上記引用の日付は、同日記の日付であるが、これら引用部は本研究の成果である修士論文にも採用したものであり、竹斎の同地域における役割を勘案するのに重要なヒントとなった記述でもある。この1回目の射和訪問において同寺社を見て回った経験がこれら記述に目を留まらせる遠因となった。

またこの訪問では、十二代目竹川欽也氏の妻であり（竹斎は七代目）、現在、射和文庫を管理する竹川隆子氏にもお会いしている。竹川邸、また射和文庫は、観光施設ではなく、また文化財として行政の管理にも置かれていない。そのため施設の観覧・調査には竹川家の承諾を得なくてはならなかったが、隆子氏に電話連絡をし、来意を告げると訪問を快く承知して下さった。

当日隆子氏は、竹斎以来の居住空間であり、近世期には村民の集会所・学問の場でもあった射陽書院、さらに竹斎使用の茶室、や庭園等々、重要な物件を案内してくださった。更に、文庫に所蔵されている多くの書の中から、竹斎が蓄えて目を通したと思われるさまざまな新聞や書籍、射和文庫管理上の帳面数冊を見せていただいた。これら帳面こそが、村民へ書籍貸読、観覧が行われていた証であり、ここから村の「文化の発信者」である「竹斎」像を確信しえたのである。近世期以来、自邸の射陽書院や村内の寺社において村民の人々に講釈をし、また自身の書籍を貸読せしめ、知識の向上を図っていた竹川竹斎が、明治以降は新政府の推し進める「開化」の先導者であったこと、これらを結論付けた修士論文にとって、この1回目の訪問は多くのヒントを得るものであった。

2回目の訪問から約5ヵ月後に2回目の訪問を行った。今回は竹川邸と射和文庫のみを訪問地として、竹川隆子氏には前回見ることでできなかった資料の閲覧をお願いしていた。特に、今まで翻刻でしか見られなかった「竹川竹斎日記」の自筆原本を見せていただくことが出来たのは収穫であった。それら自筆本と、翻刻本の論文引用箇所の記載内容が間違いないことを確認しえたのは、研究の確実性を高めるための大きな成果であった。さらに同じく、「射陽書院集会録」などを拝見させていただいたが、こちらは変体仮名も乱れがちであり、読解のためのリテラシーの不足もあり、ほとんど判別がつかなかった。このほかにも、竹斎の息子の残した、竹斎の死去や、竹斎の生前の活躍、追賞などを報じた新聞記事を集めた帳面を拝見することが出来た。これら資料からは死後の竹川竹斎という人物が社会的にどのように語られ、あるいは地域の人々にどのように顕彰され、伝承されたかを考えることが出来る。その意味で今後、「表象」としての竹川竹斎について考える上でも重要なヒントが与えられた。

2. 国会図書館の訪問

国立国会図書館には以下の3回訪問している。

2007年8月22日

2007年11月22日

2007年12月19日

修士論文執筆のために「竹川竹斎日記」は、最も重要な資料であるが、論文では大きな分量を割いて竹川竹斎がどのような新聞を読んだか（新聞の種類と記事内容）、どのように新聞を読んだか（読書の様態）な

どの検討を行っている。

8月の第1回目の調査では、竹斎日記中に引用された「熊本新聞」「西海新聞」の記事が実際どのようなものであったか、全体像を把握するために赴いている。だが、「熊本新聞」は日記中には4号との記載があるものの、国会図書館で調べたところ4号は、日記の日付の遙か以前に出版されていたものであり、竹斎が新聞から引用していた西南戦争の記述も存在しなかった。つまり4号とあった記述は何らかの誤りであったと考えられる。当然のことではあるが、竹斎日記の記述についてそのまま鵜呑みにすることは必ずしも出来ないことを思い知らされた。

2回目、11月の調査では前回の懸案だった竹斎による西南戦争の記述を探索するために、「熊本新聞」の調査に再度赴いた。結果、西南戦争の記述は4号ではなく、別号の122号であり、その号から竹斎が引用していた西南戦争の記述を確認しえた。

3回目の調査は、すでに修士論文もほぼ執筆を終えたところに行った。論文引用箇所の新聞記事が果たして間違いがないか、最終的な確認のため赴いた。論文中、明治初期新聞の引用は、名古屋大学図書館所蔵の「明治新聞雑誌集成」に拠ったが、同書は初期新聞をコピーして集成したものであり、印刷も不鮮明な箇所も多い。そのため、引用資料の完全を期すため、幾つかの新聞について記述が間違いがないか実際に目で見て確認した。

3. 書籍購入について

購入書籍は以下の8冊である。

- ①『竹斎日記 稿』（松阪大学地域社会研究所発行）
1991-1998
- ②『近代日本の地域社会と名望家』高久嶺之介 柏書房 1997
- ③『江戸の教育力』高橋敏 筑摩書房 2007
- ④『日本新聞通史』一八六一〜一九八六 春原昭彦 新泉社 1987
- ⑤『ニュースの誕生——かわら版と新聞錦絵の情報世界 東京大学コレクション9』東京大学総合研究博物館 東京大学出版会 1999
- ⑥『近代日本の新聞読者層』山本武利 法政大学出版局 1981
- ⑦『声の文化と文字の文化』W. J. オング [著] 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳 藤原書店 1991
- ⑧『幕末維新と情報』（幕末維新論集10）保谷徹編

吉川弘文館 2001

①は、三重県射和の名望家竹川竹齋本人による日記であり、すでに再三触れてきたように修士論文を執筆するための最重要資料である。特に竹齋本人に焦点化していない、修士論文の他の章にも多く引用しており、近世期から明治初期にかけての地域の名望家の社会、文化的活動実態を知るのにも有効である。その意味で②の資料も同様であり、それら名望家の具体的な活動のみならず、歴史的意義にも触れており、竹齋の位置づけを勘案する際にも参考とした。③の『江戸の教育力』は、竹齋や、明治初期に活躍した多くの名望家が生まれ育った近世期の教育のシステムについて触れている。江戸期において知識や教養がどのように伝播したのか、またその意義は何かを論じており、新書という限界はあるものの彼らの知識や文化活動がどのような基礎を持っていたか知見を得た。

④の資料は、明治初期から新聞の概念が西洋からどのようにもたらされ、どのような人々の手により、誕生し育ったのか、という新聞の沿革史である。また、特に最初期の新聞について、それ以前の新聞の原型と見做される諸メディアとの過渡的な状況にも触れて、豊富な図版で説明するのが⑤の資料である。さらにその新聞が実際の読者にどのように読まれていたのか、階層別、地域別に検討したのが、⑦の山本武利の著作である。これらの資料は近代期の新聞の在り様を考える上での基本図書であり、研究の水準と言える。当時の新聞と世相がどのような形態にあるか、想像する上でも有効な資料であり、竹川竹齋の新聞利用について検討する上で適宜参照した。

近世期の、情報メディアである「風説」がオーラリティに依拠するのであれば、それが近代以降に新聞などの活字となり、視覚を介して現れることはどのような意味があり、また人々の意識にどのような変容をもたらすのか。⑦のオングの著書はこのような問題意識に基づいており、竹齋にも見られる、徐々に視覚に特化される新聞利用の意味について考察する際に有効であった。そして風説や、新聞を検討する際に、その周辺の「情報」全般についてどのような批評が有効であるか、そのヒントは⑧の論集より多く得ることが出来た。

またこの他に、以下12点の図書や論文について、名古屋大学附属図書館を通じて、相互貸借や複写を利用した。

①「知識行動の現代をめぐる歴史社会学的考察 図書館を中心として」富山英彦 『年報社会学論

集』No. 15, 2002

- ②『射和文庫保護領目録』 愛知教育大学教育学部 1985
- ③『射和文庫射陽書院略目録』 竹川政胖 1866
- ④「佐藤信淵と竹川竹齋」山崎留吉 『秋田県人雑誌』 第七卷第十号 昭和9年10月
- ⑤「勝海舟と竹川竹齋」山崎留吉 『日本及日本人』 第百六十四号 昭和3年11月
- ⑥「北辺新聞」
- ⑦「明治・大正期の静岡県内新聞縦覧所」新美愛和 『葵・静岡県立中央図書館報』 Vol. 17
- ⑧「新聞万華鏡8 明治初年の新聞縦覧所」上田由実 『開港のひろば：横浜開港資料館報』 Vol. 75 2002
- ⑨「新聞万華鏡7 明治初年の新聞縦覧所」上田由実 『開港のひろば：横浜開港資料館報』 Vol. 74 2001
- ⑩「新聞万華鏡4 幕末・明治初期の新聞販売店」上田由実 『開港のひろば：横浜開港資料館報』 Vol. 71 2001
- ⑪「明治初年の民間図書館」喜多村生 『書誌』 Vol. 4 1926
- ⑫「明治期の読書論：読書の対象と方法」大場博幸 『出版研究』 Vol. 32 2002

4. 研修の成果と本研究の意義

これまで、明治初期の読書施設については、図書館史の側から検討されてきているが、設立時期や場所、設立者について概括的に触れるにとどまり、詳細について触れたものは多くない。さらにこの時期の読書施設は、前近代図書館から近代図書館への過渡期であり、未熟であるとされ、それ自体重要な論点とはされてきていない。また触れてはいても東京を中心とした、大規模の図書館に触れるのみであり、各地域の、さらには各地域の事情に即して本来考察されるべき読書施設の実態に言及して来なかった。

本研究は、これら先行論の問題点をふまえ、当該期の読書施設について三重県射和町をフィールドとして詳細に検討してきたが、その結果として①当該地域の地域文化をふまえたうえで、その地域に読書施設が望まれた理由について明らかにしえたこと、②それら読書施設を取り入れる際に、重要な役割を果たした名望家層、竹川竹齋の村における役割について検討しえたこと、③さらにそれら読書施設が、結果的に地域に与

えた影響を、明治以降の「開化」との影響で捉えたこと、などを成果として考えることが出来るだろう。

また論文脱稿後、「リテラシー研究」第一号（2008.1）への掲載が決定した。掲載誌は学術雑誌として未だ歴史を持たないものの、多くの専門家に向けて発信されるメディア研究誌であり、論文の成果を発表するには最良の媒体であると考えている。願わくは論文の効果として、現在まで続く東京を優位とした文化観を相対化し、さらに図書館史のみならず地域史・地方史等へ貢献したいと考えている。

最後になってしまったが、今回このような機会を与

えてくださった「人文学フィールドワーカー養成プログラム」をはじめ、事務の労をとってくださった方々と、推薦と指導を頂いた坪井秀人教授に感謝したい。

今回のプログラムをうけて、学外に出て資料を探す事や、その資料を所蔵されてきた方々とお会いし、お話を聞く事の難しさ、また見せて頂いた一時資料をいかすために必要な基礎知識の大切さを痛感した。私自身の力不足により、当初予定したフィールドワークまで至る事が出来なかった事は、残念であった。だが以上のような多くの経験を、私自身の今後の研究にいかしていきたいと考えている。